

## 司訳院倭学書の朱円について

著者	菅野 裕臣
雑誌名	韓国語学年報
号	1
ページ	9-19
発行年	2005-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001530/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001530/</a>

## 司訳院倭学書の朱円について

菅野裕臣  
神田外語大学

1. 1. 司訳院刊行の訳学書のうち蒙学と清学の辞書類, すなわち『蒙語類解』(1768), 『同文類解』(1748), 『漢清文鑑』(1771?)にはモンゴル語, 満洲語, 漢語のハングル表記にさまざまな diacritical mark (識別記号) が付いていることが知られている。これらについてはすでに日本人, 韓国人研究者の言及があるが, これらの識別記号がモンゴル文字と満洲文字の正確な綴りを示そうとしたものであることがほぼ明らかとなっている。なお上記の3種の辞書のうち『漢清文鑑』の満洲語語彙および漢語語彙の見出しはそれぞれ満洲文字と漢字で示されるが, それ以外の部分, すなわち漢語の標音と満洲語による注釈の部分は全面的にハングルだけによっており, 他2種の辞書におけるモンゴル語, 満洲語部分もやはりハングルだけによっていて, モンゴル文字, 満洲文字があらわれないという特徴がある。

1. 2. ところで清学書の読本のうち『八歳兒』(1777), 『小兒論』(1777), 『清語老乞大』(1765) (これらの満洲語本文は満洲文字で示される) のある種の本には満洲語のハングル表記に朱円の施されたものがあり (多分筆の頭に朱をつけて紙に押したものである), これについては菅野裕臣(2005)が朱円の施された部分と清学の辞書類での識別記号のある部分とが密接な関係のあることを明らかにした。<sup>(1)</sup> また菅野裕臣(2005)は蒙学書と清学書の識別記号と清学書の朱円を考察することにより, およそ4つの点を指摘しようとした(当該論文の3.を参照)。

以下に司訳院訳学書中の他言語をあらわすハングル表記をハングル対音と呼ぶこととする。ハングルは河野六郎(1979: 398)によってローマ字転写することとする。

2. 1. ところでこの朱円は倭学の読本『重刊改修捷解新語』(1781) (ひらがなの右にハングル対音が付けられている) のうち東洋文庫本と駒沢大学濯足文庫本にも施されており, このことにはじめて言及したのは安田章(1960/1980: 103-105[引用は1980のものによる。以下同])であるが, それを要約すると次のごとくである。

(1) 仮名本文に朱円の施されたもの

- 1) 「や」, 「ゆ」, 「よ」, 「わ」を添えた拗音節と撥音節の表記
- 2) 促音「っ」, 「く」と直前の音節との中間

「捉・撥・拗音節以外に, 仮名本文中で朱円は見られない点から推すと, 仮名表記の上で, これらを, 特に他と区別しようとしたのであろう。」

(2) 音注諺文<sup>(2)</sup>に朱円を施したもの

- 3) 仮名表記のままに, 発音が対応しない場合: にくしき nyukusiki III11b; いわうて 'i'g'utyai VI 5<sup>(3)</sup>
- 4) 「は」 ha 「は」の発音は, 音注鉢で示される[Φa]が標準的であると考えた結果

によるものと思う。」

- 5) 「御」は「お」, 「ぎょ」, 「ご」いずれか判明しないから, 音注に対して, それぞれ朱をつけ, 注意をしたのであろう。」
- 6) 「開長音・拗長音が, 歴史的仮名遣で記された場合, 表記のままに, 一々発音すれば, 連母音の融合した形にほど遠くなるから, 表記と対応しない, 発音どおりの音注に, 特に朱を打ったのであろう。」: だんかう *tan̄ko'u* IV32; 御くらう *ŋkokuro'u* VII26b; ちうしん *cyu'usin* I 24; ふけうに *mpukyo'uni* II 6.
- 7) ザ・ジャ行-zを含むハングル(「これは, 朝鮮語史的に, もはや, この諺文が用いられなくなっていたからであり, 日本語の方には問題はないであろう。」)
- 8) mp, pを含むハングル

安田章(1960/1980: 105)はこう結論づけている。「想像を廻らすと, 朱円は, 後に施されているように, 日本語に十分習熟すれば不必要となる類いのものである。だから, 音注諺文の朱の出入りは, それが, 必ずしも必須でなかったことを示すもので, この改修本を用いた者の能力による所が多分にあった。」

2. 2. 筆者の調査によれば, 『重刊改修捷解新語』は, 安田章(1960/1980)の言及した2本を含め, 次の諸本に朱円が施されている。なお倭学書のうちこれ以外に朱円の施されたものを筆者は知らない。

A 東洋文庫本 (VII-1-55) *	全巻ぞろい	巻頭と末尾の朱円 なし	付録 第十下末尾 (朱円あり) なし
B 駒沢大学濯足文庫本 (370-1)	第一巻筆写本	第一, 二巻のみ	第十上末尾 (朱円あり)
C 韓国国立中央図書館本(한—40—4)	第十巻下欠	あり	なし
D ソウル大学校奎章閣일사 文庫本(일사古 495. 68G155C)	第七, 八, 九 巻のみ現存	あり(巻八の巻頭なし)	第十下末尾 (朱円なし)
E ソウル大学校奎章閣文庫本 (奎 3952) **	第三巻のみ朱 円あり	なし	

\* 京都大学 1960 影印

\*\* 弘文閣 1990 影印

以上のうちE本はひらがなにしか朱円が施されていないという点で他とは異なる。

3. 以下にA~E本における朱円に関して整理してみる(もちろんD本, そして特にE本のように朱円の施された巻が少ないために, 全体像がわかりづらいものもある)。必要に応じて用例の一部の所在箇所を示す。

3. 1. ひらがなに朱円の施されたもの:

- 1) 拗音: 「し<sub>二</sub>や」<sup>(4)</sup> sya VII1b3ABCD, I 3b1ABC, I 29a3AC, ssya VIII5a2ACD, I 5a3ABC, 「ち<sub>二</sub>や」 cya III18a3ABCE, VI8a1AC, VI25a2AB; 「し<sub>二</sub>ゆ」 syu VII1a4ABCD, I 2a1ABC, VII6a3ABD, VI22b4AB; 「き<sub>二</sub>よ」 kkyo X中 20a1ABC, 「し<sub>二</sub>よ」 syo III15b4ABCE, VII6a4ABCD, I 12a1ABC, syon III28a4ABCE, 「里<sub>二</sub>よ」<sup>(5)</sup> ryo VII4b2ABCD, ryon III24b1ABCE; 「く<sub>二</sub>王」 koa III24b1ABCE, VIII16a1ABCD, II18a4ABC, ηkoa VII4b2ABCD(合字). 合字の真中に朱円あり. ただしC本は「や」, 「ゆ」の上に朱円あるものあり. 例えば「し<sub>二</sub>や」 I 9a3C, 「し<sub>二</sub>ゆ」 VI22b4C.
- 2) 拗長音: 「き<sub>二</sub>やう」 kyo'u III28a3ABCE, ηkyo'u VIII1a4ABCD, VIII6b4ABD, 「し<sub>二</sub>やう」 syo'u IV22b1ABC, syo'uj III32a3ABCE, I 19b4ABC, 「ち<sub>二</sub>やう」 cyo'u VII6b1ABCD, III115a4ABCE, II 7b2ABC, 「ひ<sub>二</sub>やう」 pyo'u II 13b1ABC, mpyo'u II 1b2ABC, 「三<sub>二</sub>やう」 myo'u VIII4a1ABCD, I 16b3ABC, IV9b3AC, myo'uj VII15b4ABCD, IV9b4AC, 「里<sub>二</sub>やう」 ryo'u VII18a4ABCD, V 10a1ABC, VI1a3BC, ryo'uj VII7a1ABCD, IV4a3ABC, IV22a4AC(「う」の上の2字は合字). 合字と「う」の中間(「う」字の上の点の部分にかか)る)に朱円あり.
- 3) a. 促音: 「か<sub>二</sub>く」 kak IV17a1ABC, 「と<sub>二</sub>く」 tok IV10a4ABC, I 10a2C, 「や<sub>二</sub>く」 yak 付録 3a2A(合字). 2字の中間に朱円あり. ただし「く」の部分に朱円のあるものもあり. 「と<sub>二</sub>く」 tok I 10a2AB, 「や<sub>二</sub>く」 yak 付録 3a2C.
- b. 「き<sub>二</sub>やく」 kyaku III13b2ABCE, VIII18a4ABCD, 「し<sub>二</sub>やく」 syaku VI29a3AB, 「ち<sub>二</sub>やく」 cyaku VII15a2ABCD, II 3a1ABC, 「ひ<sub>二</sub>やく」 hyak X下 8b4ABC, 「し<sub>二</sub>よ<sub>二</sub>く」 syoku II 9a4C, II 9a4AB(合字).  
拗音の部分の2字の中間に朱円あり. 「し<sub>二</sub>やく」 syaku VI29a3C, 「し<sub>二</sub>よ<sub>二</sub>く」 syoku VI10b2Cのように別の位置に朱円のあるもの, 「し<sub>二</sub>よ<sub>二</sub>く」 syoku II 9a4AB, 付録 3a2AC, zyoku III21a1AB, III21a1Eのように2つの朱円のものもある.
- 4) 促音: a. 「あ<sub>二</sub>つ」 at VIII11b3ABCD, III26b4ABC, I 23b2AB, 「い<sub>二</sub>つ」 it VIII17a1ABCD, I 10a4ABC, 「ゑ<sub>二</sub>つ」 yeit VII6a1ABCD, I 25b2ABC, 「お<sub>二</sub>つ」 ot IV8a2ABC, 「か<sub>二</sub>つ」 kat IV6a4ABC, 「け<sub>二</sub>つ」 kyait IV13b1ABC, 「さ<sub>二</sub>つ」 sat VII7b1ABCD, I 8a2ABC, I 9a3AC, zat IV18b1C, 「し<sub>二</sub>つ」 sit VII13a2ABCD, VII1a1CD, zit IV21a2BC, IV13b1, 「せ<sub>二</sub>つ」 syait IX9b4ABCD, IV13a4ABC, 「た<sub>二</sub>つ」 tat VIII6b2ABCD, 「は<sub>二</sub>つ」 hoat IX10b3ABCD, VIII1a1CD, 「ひ<sub>二</sub>つ」 pit X上 4b3ABC, hit X上 15a2ABC, mpit IX16a3BCD, 「へ<sub>二</sub>つ」 pyait IV24a4C, mpyait VIII4a3ABD, 「ま<sub>二</sub>つ」 mat VII7a2ABCD, I 10a3AC, 「み<sub>二</sub>つ」 mit VIII1a2ABCD, 「も<sub>二</sub>つ」 mot VII20b4ABCD, I 4b4ABC, II 17a4AC, 「や<sub>二</sub>つ」 yat IV11b3ABC, 「れ<sub>二</sub>つ」 ryait IV29b2ABC, 「わ<sub>二</sub>つ」 oat VIII1b4ABCD. 2字の中間に朱円あり.
- b. 「し<sub>二</sub>やく<sub>二</sub>つ」 syat IV20a2ABC, 「し<sub>二</sub>ゆ<sub>二</sub>つ」 syut VIII11b1ABCD, VIII20b2ABD, II 3a3ABC, VII18a4B, 「ち<sub>二</sub>よ<sub>二</sub>つ」 cyot IV14a4ABC(上の2字は合字). 合字(2字)の中間および合字と「つ」との中間に2つの朱円あり. ただし「し<sub>二</sub>ゆ<sub>二</sub>つ」 syut VIII20b2C, 「し<sub>二</sub>ゆ<sub>二</sub>つ」 syut X中 5b1Cのようなものもあり.

5) 撥音：「あ<sub>二</sub>ん」an\* VII6b4ABCD, I 6a1ABC, ただし「あ<sub>一</sub>ん」an 付録2b1C, 「あ<sub>二</sub>ん」an 付録2b1A (\*印のものは付録等で特殊な表記のあるもの。以下同じ), 「い<sub>二</sub>ん」in\* VII3b4ABCD, VII13b4ABC, ただし「い<sub>一</sub>ん」in 付録2a1C, 「い<sub>二</sub>ん」in 付録2a1A, 「う<sub>二</sub>ん」un 付録2a4C, 「ゑ<sub>二</sub>ん」yəin\* I 27a1AB, ただし「ゑ<sub>一</sub>ん」yəin 付録2b3C, 「ゑ<sub>二</sub>ん」yəin 付録2b3A, 「え<sub>二</sub>ん」yəin 付録2b3C, 「お<sub>二</sub>ん」on 付録2b1C, 「於<sub>二</sub>ん」on 付録2b1C, 「加<sub>二</sub>ん」kan\* VII19a4ABCD, I 12a1ABC, IV1b4AB, ŋkan X中17b4ABC, ただし「加<sub>一</sub>ん」kan 付録2a3C, 「加<sub>二</sub>ん」kan 付録2a3A, 「き<sub>二</sub>ん」kin VII4a1ABCD, II 3a3AB, ただし「き<sub>一</sub>ん」kin 付録2b2C, 「く<sub>二</sub>ん」kun\* I 26b2ABC, ŋkun IX11a2AB, ただし「く<sub>一</sub>ん」kun 付録2b1C, 「く<sub>二</sub>ん」kun 付録2b1A, 「化<sub>二</sub>ん」kyəin\* IV5a2ABC, ŋkyəin VIII9a2ABCD, ただし「化<sub>一</sub>ん」kyəin 付録2b1C, 「化<sub>二</sub>ん」kyəin 付録2b1A, 「こ<sub>二</sub>ん」kon\* VIII22a4ABCD, I 7a3ABC, ただし「こ<sub>一</sub>ん」kon 付録2b1C, 「こ<sub>二</sub>ん」kon 付録2b1A, 「さ<sub>二</sub>ん」san\* VII3a1ABCD, I 2a3ABC, VII1b1B, zan\* II 15a2B, ただし「さ<sub>一</sub>ん」san 付録2b2C, 「さ<sub>二</sub>ん」san 付録2b2A, zan II 15a2AC, 「し<sub>二</sub>ん」sin\* VII4b4ABCD, I 6a2ABC, I 1a1BC, VII21b4CD, VII1a1D, 「し<sub>一</sub>ん」sin 付録2b3C, 「し<sub>二</sub>ん」sin 付録2b3A, zin II 9a1ABC, 「壽<sub>二</sub>ん」su n 付録2b4C, 「せ<sub>二</sub>ん」syəin\* VIII1b1ABCD, I 15a1ABC, I 20b3AC, ssyəin\* I 10b4ABC, ssyəim\* II 25a1AB, zyəin IV7a1A, VI3a2B, ただし「せ<sub>一</sub>ん」syəin 付録2b4C, zyəin II 16a2, 「せ<sub>二</sub>ん」syəin 付録2b4A, ssyəin III13a4B, VI21a3C, syəim II 25a1C, zyəin II 16a2AC, VII1a2ABCD, II 16a4ABC, 「そ<sub>二</sub>ん」son\* I 29a4BC, zon\* I 4a4AB, IV19a3A, VII18b2ABD, I 6a1ABC, ただし「そ<sub>一</sub>ん」son 付録2a3C, zon VII3a2ABCD, 「そ<sub>二</sub>ん」son 付録2a3A, 「太<sub>二</sub>ん」tan\* VII12b2ABCD, III4b4ABC, ただし「太<sub>一</sub>ん」tan 付録2a3C, 「太<sub>二</sub>ん」tan 付録2a3A, 「ち<sub>二</sub>ん」cin\* VII3b4ABCD, II 7b2ABC, ただし「ち<sub>一</sub>ん」cin 付録2a2C, 「ち<sub>二</sub>ん」cin 付録2a2A, 「つ<sub>二</sub>ん」cu n 付録2a4C, 「て<sub>二</sub>ん」tyəin\* VII17a1ABCD, II 10b1ABC, ただし「て<sub>一</sub>ん」tyəin 付録2b1C, 「て<sub>二</sub>ん」tyəin 付録2b1A, 「と<sub>二</sub>ん」ton 付録2a1C, 付録2a2C, 「奈<sub>二</sub>ん」nan\* VIII3a3ABCD, II 16a3AB, ただし「奈<sub>一</sub>ん」nan 付録2a4C, 「奈<sub>二</sub>ん」nan 付録2a4A, 「に<sub>二</sub>ん」nin\* VII7a1ABCD, I 29b1ABC, VI28b1B, ただし「に<sub>一</sub>ん」nin 付録2a1C, 「に<sub>二</sub>ん」nin 付録2a1A, 「ぬ<sub>二</sub>ん」nun 付録2a2C, 「ね<sub>二</sub>ん」nyəin\* VII3a4ABCD, VI23a3ABC, nyəin VII5b2ABCD, I 2b1ABC, ただし「ね<sub>一</sub>ん」nyəin 付録2a4C, 「ね<sub>二</sub>ん」nyəin 付録2a4A, 「の<sub>二</sub>ん」non\* 付録2b1C, 「者<sub>二</sub>ん」hoan\* VIII9a4ABCD, IV8b3ABC, 「者<sub>一</sub>ん」hoan 付録2a1C, mpan III16a4A, 「者<sub>二</sub>ん」hoan 付録2a1A, pan IV26a4ABC, mpan VII17a1ABCD, I 4b1ABC, VII18b3BCD, 「ひ<sub>二</sub>ん」hin\* 付録2b3C, 「ひ<sub>一</sub>ん」hin 付録2b3A, pin X16a2AB, 「ふ<sub>二</sub>ん」hun\* IV31b1ABC, pun\* V 10b2B, mpun\* IV21a3BC, ただし「ふ<sub>一</sub>ん」hun 付録2b2C, 「ふ<sub>二</sub>ん」hun 付録2b2A, pun VIII9b3ABCD, I 6a3ABC, I 23b4AB, mpun IV27a4ABC, IV21a3A, 「へ<sub>二</sub>ん」hyəin\* VII1b4ABCD, III28b4BC, 付録2a1A, pyən II 14a3ABC, ただし「へ<sub>一</sub>ん」hyəin(ママ) 付録2a1C, 「本<sub>二</sub>ん」hon\* VIII17b4ABCD, II 17a4AB, ただし「本<sub>一</sub>ん」hon 付録2a1A, 「本<sub>二</sub>ん」hon 付録2a1A, II 17a4C, 「ま<sub>二</sub>ん」man\* X下5b3ABC, ただし「ま<sub>一</sub>ん」man 付録2b1C, 「ま<sub>二</sub>ん」man 付録2b1A, 「み<sub>二</sub>ん」min 付録2b3C, 「む<sub>二</sub>ん」mun 付

録 2a4C, 「め-ん」 myəin\* VII8a3ABCD, ただし「め-ん」 myəin 付録 2b3C, 「め-ん」 myəin 付録 2b3A, 「も-ん」 mon\* VII6b4ABCD, I 2a1ABC, ただし「も-ん」 mon 付録 2b3C, 「も-ん」 mon 付録 2b3A, 「や-ん」 'yan 付録 2b1C, 「ゆ-ん」 'yun 付録 2b2C, 「よ-ん」 'yon 付録 2b3C, 「ら-ん」 ran VII4a2ABCD, I 21b4ABC, IV30a4AC, ただし「ら-ん」 ran 付録 2a4C, 「ら-ん」 ran 付録 2a4A, 「里-ん」 rin\* 付録 2a2C, 「る-ん」 run 付録 2a2C, 「れ-ん」 ryəin 付録 2a3C, 「ろ-ん」 ron 付録 2a1C, 「王-ん」 'oan\* IV16a4ABC, ただし「王-ん」 'oan\* 付録 2a3C, 「王-ん」 'oan 付録 2a3A, 「み-ん」 'in 付録 2a4C, 「を-ん」 'on 付録 2a2C(合字); 「し-ゆ-ん」 syun\*, ただし「し-ゆ-ん」 syun 付録 2b4AC, 「く-わ-ん」 koan\* 付録 2b4C, ただし「く-わ-ん」 koan 付録 2b4A, 「く-王-ん」 koan\* I 1a3ABC, kkoan I 25a2ABC, ただし「く-王-ん」 koan 付録 2b4C, 「く-王-ん」 koan 付録 2b4A(合字). 「ん」とその上のかなとの中間に朱円あり(「し-ゆ-ん」 syun V18b2ABC, II13b4C, 「志-ゆ-ん」 zyun 付録 2b4C のように, 2つの朱円を施したのものもある). 一般にC本では「ん」よりに朱円を施す. 例えば「ゑ-ん」 'yəin I 27a1C, 「し-ん」 sin I 9a4C, 「ね-ん」 nyəin I 13a3C. 上記の原則からはずれたものも散見される.

- 5a) 時折かなとハングル対音の双方に, あるいはハングル対音に朱円を施すものがある. 「ち-や」 cya VI25a2C, 「し-ゆ」 zyu X下 16a4BC, 「し-よ」 syo I 22b3B, V6b3C, 「あ-つ」 'at III26b4C, 「さ-つ」 zat VIII16b4ABCD, I 1b4ABC, IV18b1AB, II8b2BC, 「さつ」 zat II 8b2A, 「し-つ」 zit VII13b2ABCD, IV9b1ABC, IV13b1BC, 「ひ-つ」 mpit IX16a3A, 「へ-つ」 pyəit IV24a4AB, 「も-つ」 mot II 17a4B.
- 5b) 撥音を含む合字では付録でA本の場合かなとハングル対音の双方に, C本の場合ハングル対音にのみ朱円を施すものがある(上記5)の\*印を見よ). 全般にE本で本来かなに朱円を施すべきと考えられるところに朱円がない場合が多い.

### 3. 2. ハングル対音に朱円の施されたもの:

- 6) a. 開長音: 「あう」 'o'u I 28a1ABC, 「かう」 ko'u VII3a1ABCD, I 4a1ABC, III1b4ABC\*, ただし「かう」 ko'u III1b4E, 「さう」 so'u VIII17a3ABCD, I 10b1ABC, zo'u VIII1b3ABCD, IX17a4ABC\*, ただし「さう」 zo'u VIII17a4E, 「たう」 to'u VII9a1ABCD, I 2b3ABC, III2a4ABC\*, nto'u I 3a1ABC, ただし「たう」 to'u III2a4E, 「なう」 no'u VII3a2ABCD, I 13a2ABC, I 29a4AC, III11a2ABC\*, ただし「なう」 no'u III11a2E, 「ほう」 ho'u VII20a2ABCD, I 5a4ABC, I 2a1AC, po'u I 18b3ABC, mpo'u I 27a2ABC, 「まう」 mo'u X下 8a3ABC, 「やう」 'yo'u VII2a1ABCD, I 1b4ABC, III1b3ABC\*, ただし「やう」 'yo'u III1b3E, 「らう」 ro'u VII6b1ABCD, I 25b1AC, III15a4ABC\*, ただし「らう」 ro'u III15a4E, 「わう」 'o'u VIII23b4ABCD, III21a2ABC\*, ただし「わう」 'o'u III21a2E. なお「く-王-う」 ko'u X上 4b2B.
- b. 拗合長音: 「けう」 kyo'u I 10b1ABC, 「せう」 syo'u VII21b4BCD, I 1a1BC, VII1a1CD, ssyo'u VII6a1ABCD, I 2a3AC, III7a4AC, zyo'u X上 8b3ABC, 「てう」 tyo'u VIII2b2ABCD, I 7a1ABC, III15b3\*, ただし「てう」 tyo'u III15b3E, 「れう」 ryo'u VII16a2ABCD, I 8a1ABC, III10b2ABC\*. ただし「れう」 ryo'u III10b2E.

c. ウ段拗長音：「ちう」cyu'u VII13b4ABCD, I 1a3ABC, III4A3ABC\*, ただし「ちう」cyu'u III4a3E, 「こう」nyu'u I 25a1ABC.

以上, \* 印のもののみがE本にあらわれる。

- 7) ザ行のかなのハングル対音 (z を含む) : 「さ」za VII2a3ABCD, I 1b3ABC, 「し」zi VII1a3ABCD, I 2a3ABC, VII18b3BCD, I 4b1AC, zjin I 4b3ABC, I 8b4AC, 「志」zi VII3a1ABCD, X上 3a3ABCD, 「す」zu VII3b2ABCD, I 6a4ABC, 「せ」zyei I 10b3ABC, zyein I 15b1ABC, 「そ」zo VII5a1ABCD, I 26a3ABC, III25b3ABC\*, ただし「そ」zo III25b3E.

なお次のようなものも見られる。「し」si III23a4E, 「す」ssu III20a1E; 「し」si I 29a4B, 「せ」ssyoi II 1a4B, III1b2B, 「志」si 付録 5b4AB.

- 8) ハ行, バ行, パ行のかなのハングル対音：「は」ha VII18a1ABCD, I 1b3ABC, I 3b4BC, pa VII3b3ABCD, I 2a3ABC, IV27b1AC, II 4b2BC, III3b1ABC\*, mpa IV1b1ABC, 'oa IX12b3ABCD, IX11b4ABC, ただし「は」pa III3b1E, 「者」hoa 付録 4a4AC, pa X上 11a4ABC, 'oa X上 6b4ABC, 「ひ」pi VII2b1ABCD, I 1a4ABC, III6a1AC, VI10a1BC, VII19b2BCD, mpi X上 2a2ABC, mpin IX16a4ABCD, 「ふ」pu I 10a1ABC, mpu VII1a3ABCD, I 7a1ABC, mpun IX18a1ABCD, 「へ」pyei IX4b2ABCD, II 14b2ABCD, mpyoi VII12b3ABCD, I 21b2ABC, 「ほ」po VII11a4ABCD, I 4a3ABC, mpo I 15a1ABC, 「本」ho X中 2b1ABC, po X下 5b3ABC, 'o X8b2ABC. また「ふ」hu I 17b1B, II 6a3B, VIII20b1C. なお「者」, 「本」は9)参照.

- 9) 変体仮名(第十巻上, たまに第十巻中, 多くは付録で. A本, B本, C本のみ): 「御」nko VII1a3ACD, I 1b3ABC\*, I 1b4AC, nkyo III27a1AC, III2a3ABC\*, 'o I 2b2ABC, VII1a3ACD, I 2b1AC, III1a1ABC\*, 'on<sup>△</sup> VII7a1CD, X上 3a1C, 付録 6a2C, ただし「御」nko III1b3E, nkyo III2a3D, 'o III1a1E, 「内」uci X下 5b2BC, 付録 6a2AC, 「候」so'oro\* X上 1a2B, 付録 6a2AC, 「申」mousi 付録 6a2AC, 「伊」i X中 7a2ABC, 付録 4a1AC, 「江」yoi X上 5a3ABC, X上 5a4C, 付録 5b1AC, 「於」o X上 8b2ABC, 付録 5a3AC, 「遠」o X上 1b3ABC, 付録 4b1AC, 「加」ka X上 2b3ABC, 付録 4b2AC, 「具」ku 付録 5a4AC, nku X上 4b2ABC, 「古」ko X中 5b4ABC, 付録 5b1AC, 「志」si (7)の同字参照, 「太」ta X上 5a2ABC, 付録 4b3C, 「堂」ta 付録 4b3AC, nta X上 5a2ABC, 「津」cu X上 5a1ABC, 付録 4b4AC, 「門」cu 付録 4b4C, 「天」tyei X上 2a1ABC, 付録 5b2AC, 「止」to X上 6b2ABC, 付録 4a3AC, nto X上 7a3ABC, 「奈」na X上 6b4ABC, 付録 5a1AC, 「仁」ni 付録 4a2A, 「丹」ni X上 3a2ABC, X上 7b1AC, 付録 4a2AC, 「乃」no X上 1b4ABC, 付録 5a2AC, 「者」hoa, 'oa (8)の同字参照, 「本」ho (8)の同字参照, 「三」mi X中 20a4ABC, 付録 5b4C, 「屋」ya X上 6b2ABC, 付録 5a4AC, 「里」ri X上 4a1ABC, 付録 4a4AC, 「累」ru X上 4a4ABC, 付録 4b1C, 「路」ro X中 5b4ABC, 付録 4a1AC, 「王」oa 付録 4b1AC, 「元」yain 付録 6a2C (\* 印のものはE本で変体仮名に朱円が施される; \* は巻十ではB本にのみあらわれる; <sup>△</sup> はC本にのみあらわれる).

なお「為」i 付録 1a4AC, 「遠」o 付録 1a2AC のようにE本でないのに変体仮

名に朱円を施したものがある。

3. 3. ハングル対音に朱円が施されたという点では3.2.と同じだが、3.2.とは異なり、その朱円が二重の機能を持っていると思われるもの：

10) ザ行(7参照)と開長音(6) a. 参照)あるいは拗合長音(6) b. 参照)の二重の機能を持っているもの；「さう」zo'u, 「せう」zyo'u.

11) ハ行, パ行(8参照)と開長音(6) a. 参照)の二重の機能を持っているもの；「ほう」ho'u, po'u, mpo'u.

3. 4. ひらがなとハングル対音の双方に朱円の施されたもの(この場合2つの機能が各々ひらがなとハングル対音によって分担されている)；

12) 拗音(1参照), 拗長音(2参照), 促音(3) b, 4) a, b 参照), 撥音(5参照)及びザ行(7参照)とのダブリ；「し<sub>-</sub>ゆ」zyu；「さ<sub>-</sub>つ」zat<sup>°</sup>, 「し<sub>-</sub>つ」zit<sup>°</sup>；「し<sub>-</sub>やう」zyo'u；「し<sub>-</sub>よ<sub>-</sub>く」zyoku<sup>°</sup>；「さ<sub>-</sub>ん」zan<sup>°</sup>, 「し<sub>-</sub>ん」zin, 「せ<sub>-</sub>ん」zyain<sup>°</sup>, 「そ<sub>-</sub>ん」zon<sup>°</sup>(<sup>°</sup>印のものは時折ハングル対音に朱円の施されないものが見られる)。

13) 促音(4参照), 撥音(5参照)とバ行(8参照)とのダブリ；「ひ<sub>-</sub>つ」mpit, 「へ<sub>-</sub>つ」pyeit(「ひ<sub>-</sub>つ」pit, mpit, 「へ<sub>-</sub>つ」pyeit, mpyeitのようにハングル対音に朱円の施されない場合が多い)；「者<sub>-</sub>ん」hoan, hoan, mpan, pan, 「ひ<sub>-</sub>ん」pin, 「ふ<sub>-</sub>ん」pun, pun, mpun, mpun, 「へ<sub>-</sub>ん」hyain, pyain, 「本<sub>-</sub>ん」hon. なお「ひ<sub>-</sub>やう」pyo'u, mpyo'u；「ひ<sub>-</sub>や<sub>-</sub>く」hyakuではハングル対音に朱円は施されない。

3. 5. 上記のいずれにもあてはまらないもの。

14) 「にくしきの」nyukusikino III11b1ABC.

15) 「お<sub>-</sub>お」'o'o III6a3E.

16) 「れ<sub>-</sub>い」ryei'i III9b3E.

以上を通して7), 10), 12)はザ行に関するもの, 8), 11), 13)はハ行, パ行, ヲ行に関するもの, また1)と12); 3) b.と12); 4)と12)と13); 5)と12)と13); 6) a.と10)と11); 6) b.と10); 7)と9); 8)と9)が相互に関連しているといえる。

4. 1. 以上のものの中には例外的なあらわれ方をするものもかなりあり、すべてが必ずしも統一した原理によっているわけではないことがわかる。しかし朱円に関するA本とB本の特徴が、C本、D本、E本にも見られる以上、安田(1960/1980: 105)(本稿 2.1. 参照)の言うように、朱円は「必ずしも必須のもでなかったことを示すもので」あっても、学習者が一様に注意を払った共通点が多かれ少なかれあったことを示すものと思われる。

『重刊改修捷解新語』において朱円を施した原則として次の諸点が考えられる。

(1) ひらがな2字あるいは3字の連結が1音節を示す場合には、ひらがなに朱円を施す。拗長音、「く」を含む促音、撥音を含む音節を示すひらがなが合字であること自体が、音節を明確に意識する朝鮮人にとり、特別な関心事だったことをうかがわせてくれる。かれらはそれらだけでなく拗長音、「っ」を含む促音のように合字でないひらがなの場合にも朱円を施すことによってそのひらがな連結の1音節性を示したものと思われる。このことは、ただの1例ずつだけだが、15)と16)の存在によっても裏づ



けられる。

(2) ひらがなが本来の読みとは異なる特殊な読みを持っている場合、ハングル対音に朱円を施す。

1) 長音(3. 2. の6)参照): 「かう」 ko'u, 「れう」 ryo'u, 「ちう」 cyu'u (E本ではそれぞれ「かう」 ko'u, 「れう」 ryo'u, 「ちう」 cyu'u). これらはまた長音あるいは二重母音として朱円の施されない「こう ko'u」等々とともにそれぞれ1音節を成したものと思われるが、なぜかこの1音節性は朝鮮人によって問題とされていない。

2) 「は」 oa, 「者」 oa, 「本」 o.

(3) ひらがなとハングル対音との対応が複数ある場合(a. ひらがな複数—ハングル対音1個; b. ひらがな1個—ハングル対音複数), 複数個のうちのどれかに朱円を施す。多くの場合, 多く用いられるもの, あるいは標準的と考えられるもの以外のものに朱円が施される。この場合朱円はハングル対音に施される。

3) 変体仮名(3. 2. の9)参照). 例えば「し」 si に対して「志」 si のように。これにより「者」 hoa, 「本」 ho の朱円も説明される(「は」 hoa, 「ほ」 ho を参照せよ)。

4) ザ行およびハ行, バ行, ヴ行(3. 2. の7), 8)参照)。

サ行(s)と区別される z を含むハングル対音: 「そ」 so に対して「そ」 zo (E本では「そ」 zo)。

ハ行(h)と区別される p, mp を含むハングル対音: 「は」 hoa に対して「は」 pa, mpa (E本では「は」 pa)。ただし「は」 hoa に対する「は」 ha は, 安田章(1960/1980. 本稿 2.1.4)参照)の言うように, hoa(すなわち[Φa])が標準的であると考えた結果によるものであろう。

3) は(3)の a. の場合, 4) は(3)の b. の場合にあたると思われる。

4. 2. ところで『重刊改修捷解新語』における朱円と清学書における朱円とを比較すると, 以下のようなちがいが見られる。

(1) 清学書の場合とは異なり, 倭学書の朱円に対して識別記号の付された資料が存在しない(すなわち『倭語類解』(ひらがな表記なし)には一切の識別記号がない)。

(2) 清学書の場合とは異なり, 倭学書ではハングル対音のみならず, ひらがな自体にも朱円の施されることがある。

(3) 清学書の場合は, 複数の満洲字綴りがハングル対音1個と対応する場合に, ハングル対音に識別記号が付されるが(すなわち 4.1.(3) a., すなわち 3)の場合に対応する), 倭学書の場合は, そのほかに 4.1.(3) b., すなわち 4)の場合も存在する(ただし満洲字 e にはハングル対音 o と u が対応するが, この場合ハングル対音には何らの識別記号も付されない)。

4. 1. (3) b., すなわち 4)は綴りあるいは文字のちがいを示したのではなく, 読み, すなわち発音を示したものである。なお, 4.1.(2) 2)は別のケースだが, やはり発音を示したものである。それでは倭学書ではどの程度の発音のちがいに着目

したのでらうか。

第一に k-nk, t-nt, p--mp のような清音と濁音のちがいはあまり関心を払っていなかったことがわかる。ここで関心があったのは s-z, h-p /mp (さらに hoa-ha) のちがいでだけである。すなわちこの場合ハングル字形上のちがい(従って朝鮮人にとってそれは発音上の大きな違いと思われた)に特に着目したと思われる(hoa-haのちがいについては安田章(1960/1980. 本稿 2.1.4)参照)の説明が首肯される。

第二に合音と開音のちがいにはまったく着目しなかったと思われる。直音の場合合音(こう)に対して開音(かう)に朱円を施したのに、拗音の場合は合音(り-やう)も開音(れう)もともに朱円を施していることから見ても、それは明らかである。すなわちこの場合の朱円はひらがなとハングル対音との不一致を示したにすぎない。

つまりこれらの朱円は、厳密に言えば、またしても発音のちがいというよりは、単なる「読み」のちがいを示したものだと言うべきだということになる。

5. 1. 司訳院訳学書のハングル対音の識別記号と朱円を中心としてハングル対音の性格を考察すると、菅野裕臣(2005)で得られた結論(当該論文の 3.)は倭学書にもほぼあてはまると言いうる。次の点をつけ加えておく。

(1) 倭学書のひらがな合字およびひらがなにおける朱円はハングル 1 字、すなわち 1 音節に対応する。

(2) 倭学書でのみ朱円は特殊な読みを示すことがあった(4. 2. (3) 参照)。

(3) この点は倭学書では、文字の構造からして、問題になりえなかった。

(4) 訳科の試験に「読み」があったという記録はないが、正しい文字の表記は厳しく要求されたであろう(鄭光(1997)参照)。

さらに次の点をつけ加えうる。

(5) 他方訳官たちは他言語の文字とハングルとの最大限の対応にも関心を寄せた。蒙学書では子音で終わる名詞の属格と対格の助詞は u / un および i によって示したが、これはモンゴル字綴りとハングル対音とをできるだけ対応させようという努力の結果である(例えば bicig ün / pic'ik un[発音は pic'ikun] ; bicig i / pic'ik i[発音は pic'iki])。倭学書ではいわゆる長音の場合文字の発音が生かされる(例：「こう ko'u」その他<sup>(6)</sup>)。この場合はハングル対音が現実の音声そのものでない可能性が強い(すなわちひらがな 2 字が 2 音節を示すとは限らない)。

5. 2. 清学書も倭学書も朱円の施された本はすべて 18 世紀頃のものであるから、この朱円も上限はその頃であり、比較的新しいものである。しかし漢学書におけるかなり古い版の『老乞大』に声調記号が手写されているのを見ても(菅野裕臣(1977)参照)、朱円の施し方が個人の恣意によるものではなく、それには一定のルールがあり、もっと以前から行われていた可能性も否定しえない。『捷解新語』の初刊本に朱円が見られないのは、現存する書本が実際に学習者が使用したものではないためという可能性もあると思われる。

[注]

- (1) また次のものをも参照せよ。菅野裕臣(1963 ; 1975).
- (2) 筆者のハングル対音に該当する。
- (3) ローマ数字は巻数, アラビア数字は丁数, a は表, b は裏を示す。必要に応じてさらにアラビア数字で行数を示す。また下線は当該の文字等の部分に朱円が施されていることを示す。
- (4) -でつながれたひらがなは合字であることを示す。その際たて書きのかなを横書きとする。合字の字形については『重刊改修捷解新語』付録で確認されたい。
- (5) 変体仮名はそれに対応する正字をもって示す。変体仮名の字形については『重刊改修捷解新語』付録で確認されたい。
- (6) 非常にむずかしい問題だが、日本語のある種のいわゆる「長音」が二重母音であった可能性も否定はないと思う。

#### 参考文献

- 菅野裕臣(1963)捷解蒙語のモンゴル語について、「朝鮮学報」第27輯, pp.65-93.
- (1975)書評 金炯秀著『蒙学三書研究I』, 「朝鮮学報」第74輯, pp.167-178.
- (1977)司譯院漢學書에 記入된 近世 中國語의 聲調表記, 『李崇寧先生古稀紀念 國語國文學論叢』, 塔出版社, 서울, pp.405-416.
- (2000)『捷解蒙語』について。『捷解蒙語』対訳語彙索引, 「朝鮮学報」第175輯, pp.1-83.
- (2005)朝鮮司訳院の清学書のハングル対音の性格について, 「韓国語学年報」第1号, 神田外語大学韓国語学会所収。
- 河野六郎(1979)『河野六郎著作集』1, 平凡社, 東京。
- 鄭光(1997)朝鮮期に於ける訳科清学と満州語の試験答案紙について, 畑中幸子/原山焯編。『東北アジアの歴史と社会』, pp.47-71.
- 安田章(1960/1980), 重刊改修捷解新語解題, 『重刊改修捷解新語』, 京都大学国文学会, 1960, pp.1-62.  
(『三本対照 捷解新語 积文・索引・解題編』, 京都大学国文学会, 1973 所収);  
安田章, 『朝鮮資料と中世国語』, 1980. 「捷解新語の改修重刊」, pp.91-156.
- [付記] 岡山大学の辻星児教授からは貴重な指摘を得た。辻教授に心からの謝意を表すものである。

«要旨»

「司訳院倭学書の朱円について」

**О красных кругах в учебниках японского языка,  
изданных корейским средневековым переводческим учреждением Саёгвон  
в Династии Ли**

**КАННО Хирооми  
Университет иностранных языков Канда**

Автор, рассматривая тщательно все места с красными кругами в качестве диакритического знака в учебниках японского языка, изданных корейским средневековым переводческим учреждением Саёгвон в Династии Ли, во всех текстах, сохраняемых в Японии и Южной Корее, по сравнению с учебниками маньчжурского языка, указывает на следующие пункты:

(1) В отличие от учебников маньчжурского языка нет ни одного учебника японского языка, где ксилографы сначала напечатали круги.

(2) В отличие от учебников маньчжурского языка корейские лингвисты наметили кругами не только корейскую транслитерацию, но и японскую букву.

(3) В отличие от учебников маньчжурского языка есть возможность обозначения различия произношения отчасти в учебниках японского языка.

(4) Корейские лингвисты не интересовались обозначением различия между японскими глухими и звонкими согласными посредством диакритических знаков.

(5) Корейские лингвисты не интересовались обозначением различия между японскими открытым и закрытым гласными «о» посредством диакритических знаков.

(6) Японская буква или буквосочетание с красным кругом в учебниках японского языка соответствует с одной корейской буквой, то-есть с одним корейским слогом.

(7) Красный круг, как диакритический знак, в учебниках японского языка опять-таки доказывает просто транслитерационный, а не фонетический характер корейских диакритических знаков.